

マクルーハンによる「ホット／クール」概念の批判

現代メディア論におけるその可能性と限界

東京大学 青山賢治

【問題設定】 本発表では、マクルーハンによるメディア論の「ホット／クール」という概念について、その可能性と限界が分析される。マクルーハンによると、ホットなメディアでは意味／感覚 (sense) が高精度／高品位 (high-definition) なものであり、逆にそれが低い精度／品位 (low-definition) であれば、そのメディアはクールである。ホットなメディアでは、主体が関与し (participate)、そこに巻き込まれる (involved) 度合は低い。逆にクールなメディアは、意味や解釈を補填すべき余地を大きく残し、主体が関与し、巻き込まれる度合はより高くなる。

「ホット／クール」論では、反省的主体が予め前提されず、主体の意識によってメディア／コンテンツの意味が変化するという主-客の構図が退けられる。また、メディア間の相対的な精度差／品位差により、主体の関与度、巻き込まれ方が変化するという定式によって、メディア／コンテンツによる決定論を退けられる。

だが、マクルーハンのいう意味／感覚 (sense) は、三つの水準にまたがる。①意識される知覚・意味、②意識されない感覚刺激、③メディア技術の変化による、感覚精度や感覚比率の差異化。これら三つの水準の相互関係や排除を分析することは、マルチメディア、間メディアの分析に可能性を開くことになるが、同時に曖昧さがそこにつきまとうことも避け難い。

また、クールなメディアへの関与／巻き込まれとは、半-自発的で半-受動的な状態である。メディア／コンテンツの「ホット・アップ／クール・ダウン」という変化によって、主体化の割合に移行も起こる。積極的関与／消極的巻き込みという区別は、事後的反省というかたちで、主体に遅れてやってくる問いかけである。

半世紀を越えてマクルーハンの概念がたびたび問い返されているのは、これらの理由によると考えられる。マクルーハンはマス放送の時代に、反省的主体を諸感覚の束へと解体する方向を提示した。電子と情報のスピードを身体の「触覚的」経験として提示した。だが、現代のマルチメディアは、感覚比率 (sense ratio) と複数メディアの組み合わせを、「選択」可能なものとして「デザイン」することを要請する。「ホット／クール」概念の批判をつうじて、そこにどのような関与／巻き込まれ方への呼びかけがあるのか、あらためて分析が必要とされる。

【分析と結論】 マクルーハンによれば、「ホット・アップ」と「クール・ダウン」の極限に、主体の消滅がある。ひとつの感覚のみが高められる場合、没入・陶酔 (hypnosis) へ向かう。逆に、全感覚の情報が縮減される場合、幻覚 (hallucination) が招来される。これら両極の間に、主体的な関与度の変化がある。だが、マクルーハンの時代には必ずしも意識されない感覚刺激であった領域が、今日では主体的な「選択」を要請する領域へ転じられている。

4K・8K テレビなどをはじめ、今日ではデジタル機器により感覚の閾値を超えた情報処理が行われ、情報の階層化もソフトウェアの解釈に委ねられている。感覚の精細度を高めることは、もはや誰にとっても必要な複製技術ではなく、余剰の趣味へ転じられた。感覚の精度を高めることによる②の水準の刺激は、没入や陶酔を招くのではなく、むしろ①や③の水準における意味の冗長化となって、解釈や「選択」を要請する。

逆に、音声、文書、絵画、写真、動画などがすべて等しく並置されるのがインターネットであろう。そこでは各感覚の精細度が高められるよりも、諸感覚の並列化へ向かう。どの感覚を拡張するかは、デバイスの選択も含めて使用者の趣向と選択に依拠する。文字の画像化、映像の音楽的編集、動画への文字コメントなど、複数メディアをまたぐ組み合わせや隙間の産出によって、新たな感覚刺激がもたらされるという幻覚が生起する。すなわち、目的のないネットサーフなどでは、①、③の水準から、②が幻影として導出されていると考えられる。